

還暦記念 四国八十八カ所遍路の旅の記録

第九代・清水茂久



【第2弾・平成18年2月27日発】

遍路日記（土佐：修行の道場を歩く）

1. 出発まで

前回（2005年11月・13日間）の36番札所までの遍路は、思っていたよりスムーズに終わることができ、今回もより以上の結果を出そうと意気込んで望んだ。

しかし、連休の限られた日程で最後の2日間に息子の医大の卒業式・謝恩会と、ハーモニカクラブの老人ホーム慰問の予定が入り、結局9日間の遍路を計画する。

当初より予定していた高知から松山までのこだわり（3回目も考慮すると）が強く、結局1日約40キロメートルを歩き続けるという、かなり強硬な計画表を作成した。

しかし、心配が無かったわけではなかった。12月頃から、左足の親指の付け根が歩くと痛くなり、踵から足を着いた時につま先が踏ん張れずに、そのままバタンとつま先が着いてしまうことが続いていたのだ。それでも何とかなるだろうと、予定の連休に合わせ、準備を進める。

当日（11月27日）は、早めに自宅を出て（16:20）、千代田線で東京駅に向かう。

東京駅で、仕事の終わった東京店の原さんと一杯飲み、バスに乗る。出発後（20:30発）、先輩の青木さんと、前回出会った楠田さん・金川さんに出発のメールを入れる。

2. 第1日目＝2月28日【火】 晴れ 歩行距離＝34.8km

バスは順調に走り、定刻の15分前に高知駅に着く。すぐ改札口に走ったが、8時45発の普通列車は丁度発車するところであった。

予定通り特急「しまんと1号」(8:18発)が出るまで、駅構内の喫茶店でモーニングサービスの朝食をとる。旅行者などと共に列車に乗り込むが、お遍路さんはシーズン前で2～3名が見られた。

3ヶ月前を思い出しながら車窓を眺める。天気は良く晴れ、海も穏やかで、気分は爽快である。須崎駅(8:58-9:10)でもう一度身支度を整えてから、歩き出す。

美しい小川の流れている街並みを過ぎ、国道のトンネルをくぐると、海沿いの道に出る。「かわうそ道の駅」(9:30-35)を通過し、安和に向かう。

ゆるやかな上りが続くが、今日の長丁場を考えるとどうしても早歩きになってしまう。甘夏や文旦の露天が現れるようになると、岬の上に出て、海が美しく輝いている。

ゆるい下りで安和の駅前を通り、ここから集落の中の旧道に入る。焼坂峠への入り口で標識がはっきりと分らず、そのまま上っていくと墓地に行き着き、その先の道が無い。

すぐに元の道まで戻り(約20分のロス)線路沿いを進むと、いよいよ山道に入る。

汗をぬぐいながら、南国らしい樹林の中をジグザグに登る。遍路の吊るした「道しるべ」が沢山あり、うるさいほどである。急な坂を登りきると、道もゆるやかになり、焼坂峠に出る(11:00)。

小さな切通しの峠で、涼しい風の中で一服する。周辺は幾重にも重なった山並みが続くが、道は広くなり山腹を巻きながらゆるやかに下っていく。途中大きな沢を渡るところでおいしい水を飲み、随分と長い間巻き道を歩き、急下降すると林道に出る。

線路沿いから国道に出ると、目の前に食堂『仁』があったので、少し早い昼食を摂る(11:55-12:25)。この辺の食堂は安く、ボリュームのあるカツ定食(750円)を食べる。

国道を少し歩き、土佐久礼の集落に入ると、はじめて逆打ちのお遍路さんに出会った。65才位か、年の割には軽快な足取りである。その先から、昔からの「そえみみず遍路道」に向かう。

突然、『お遍路さん』と一軒の戸口から呼び止められる。『お茶でもどうぞ、ゆっくり休んでいきなさい』とのお接待である。

しかし私は『5時までに窪川に着くために、先を急いでいるのですが…』と言うと、『それならば引き止めません』と、快諾していただく。

申し訳ない気持ちでいると、すぐにおばあさんが外に出てきてウーロン茶とみかん・おせんべい・手作りの巾着袋を差し出される。ありがたく頂戴して、道を聞き先を急ぐ。

これから登る山道の先を見ると、一面に幅何十メートルにも渡り木が切られている。

高速道路が通るそうだ。美しい山々を帯状にずっと木が切られ禿山になっている。自然か？生活か？産業か？複雑な気持ちである。

それでもそこに実際に生活している人たちに対し、一旅行者の私はなんとも言えない。

橋を渡り、旧い道しるべを見て、農道から山道に入る。細い樹林の急登を終えると、無残に木が伐られ明るく開けた尾根に出る(13:15-20)。日が当たりまぶしいくらいである。

しばらく尾根に沿ってゆるやかに上ってゆく。再び雑木林に入ると間もなく最高地点(409m)に着き、昔の茶店でもあったような広場に出る。旧い石碑がずらりと並んでいる静か過ぎるほどの所で、頭を下げながらそのまま通り過ぎる。

尾根を巻きながら急な坂を下り、竹林が出てくると田んぼのあぜ道に出て、車道に出る。すぐに七子峠(287m)の国道にぶつかる(14:40)。

ここを直進し国道と田んぼをはさんで旧道を歩く。農家の庭先に咲く野の花々(11月には全く見られなかった)を眺めながら先を急ぐが、この頃から足の裏が少し痛くなった。

再び国道に出て、時々休みながらJR土讃線の駅前を次々と通過する。「高知から〇〇キロ・四万十まで〇〇キロ」の道路標識の数字増減を一つ一つ確認しながら、黙々と歩く。この頃は脚も痛くなりさすがに辛さが増してくる。

道の駅『あぐり窪川』で休み(17:10-20)、旅館に遅れる旨電話を入れ、17時の納経には間に合わないで少しゆっくりする。

気を取り直し、薄暗くなった国道を窪川に向かう。呼坂トンネルを抜けると、下り坂になり町も近い。商店街から参道に入り、駅前に出てホッとする。

古いが小ぎれいな美馬旅館に入り(17:50)、すぐに風呂・洗濯と忙しい。本場のうなぎの蒲焼とカツオのタタキに舌鼓を打ち、ビールが美味しい。

明朝は早く出るので、お握りを作ってもらい、両足の痛むところにバンテリンを塗り、早々と床に入る。夜半には予報通り雨が降ってきて、明日は厳しい行程になりそうだが、頑張るぞ！！

3. 第2日目＝3月1日【水】 雨のち曇り 歩行距離＝45.0km

雨が降り続けているが、小降りになったのを見計らい雨用のズボンを着けて、宿を出る(6:25)。

すぐに第37番札所岩本寺(いわもとじ6:30-7:10)に着く。裏を山に囲まれ荘厳な感じの寺である。時間も早いせいか庭の掃除中で、山門に衝立が立てられていたが、その横から入る。

本堂では朝の勤行中であつたが扉を開いて本堂の土間に入れてもらう。この寺は本堂の天井格子に全国から募集した絵を使用しており、いろいろな絵が掛っていて、有名である。

本堂・大師堂と巡り、7時に納経してもらう。この頃から雨が強くなり、今回のために新調したポンチョをかぶり出発する。

今日の行程のほとんどは国道56号線で、トラックの水はねやしぶきなどで、非常に歩きにくく、先が思いやられる。

町並みを過ぎると峠にかかり、少しの間旧遍路道の山の中を歩く。佐賀温泉を通り、時折屋根の付いたバス停で休みながら、激しくなった雨の中を急ぐ。

すると突如後ろから一人の遍路が追いついてきた。50代の通し打ちの男性で、今日で20日目と言う。歩道が狭いので一列になって歩く。足も少し痛い、後ろから着いて来られると、どうしても足早になってしまう。

そこで次のバス停で一本取る間に、その人は先に行ってしまった(その人が先のコンビニに寄っている間に、追い抜いたが)。

熊井集落から旧遍路道に入る。田のあぜ道を通り、急坂の峠には明治時代に造られたレンガの隧道があった。そこを抜け下っていくと土佐佐賀の街に出る。海沿いの港町だが、活気に満ちているようには見えなかった。

鹿島が浦を左手に見ながら岬に向かって上って行く。晴れていれば海の公園と島影が、絶景のポイントとなっている。雨は相変わらず強く、風も強くなってきた。丁度登りきったところにうどん屋『庄寿庵』があり、そこに入り昼食をとる(12:50-13:25)。

ここから、再び海沿いの国道を22*延々と歩く。途中で今夜の宿に遅れそうになる旨電話を入れる。井の岬のトンネルを出たところに「南無大師遍照金剛」の幟が林立している接待所があった。

ガラス戸から覗き込むと、中から70歳位の男性に手招きされ、コーヒーにみかん・おせんべいをいただき、談笑する(15:40-50)。その人によると、ここを通る歩き遍路は「年間1,200人位だろう」との事であった。



海沿いの強風が吹き付ける中を、伊田・上川口・浮鞭・土佐入野を通過し、いよいよ中村に近づいていることが実感できる。

国道を痛い足を引き摺りながら、街から田と山に囲まれた逢坂トンネルを抜けると、四万十市（旧中村市）に入る。いよいよ暗くなってきて土佐くろしお鉄道の古津賀駅出た。

高校生が帰宅の電車を待っている。田のあぜ道を四万十川の大きな堤防に向かって歩くが、漆黒の闇で気味が悪いほどである。最後の2^キは本当につらい。

民宿・月白(18:50 着)は堤防から上がった住宅街の一角にあり、暗い中を探すのが大変であった(2回電話をかけて聞いた)。個人の大きな住宅を利用した民宿で、元気な女将さんは東京に長くいて、最近戻ってきて民宿を始めたようだ。

大の相撲好きで、柏鵬や若乃花などの色紙や一緒に撮った写真が沢山あった。

今日の行動時間は朝から12時間以上であり、足への負担が心配であった。

しかし、お風呂に入るとそれも和らぎ、明日の足摺岬に戻った先にある宿『ペンションサライ』を予約してから、床に入った。

4. 第3日目＝3月2日【木】 曇りのち晴れ

予定通り起床する。しかし脚に違和感があり、右足のくるぶしから甲にかけて腫れて赤くなっている。左足の方は、親指の付け根から踵にかけての筋に痛みがある。

体重をかけなければ痛みは無いが、これではこの先歩き続けることは難しそうである。

朝食後、宿の女将さんに事情を話すと、『帰るのなら中村の駅まで送りましょう。』との返事をいただく。

この際、潔く歩き続けることを諦めて、今回の遍路を中止することにする。

中村駅に着く(7:30)と、飛行機で帰るために高知までの切符を買う。しかし、すぐ脇の表示を見ると、そのまま特急四万十1号に乗って岡山まで行き、新幹線でも充分午後には帰宅できる、ことが解かった。たまにはのんびりと汽車の旅も良いだろうと切符を買い直す。

定刻(8:04)に出発した列車は、雪の大歩危小歩危を走り、夜しか渡ったことのない瀬戸内の海を、昼に渡ることが出来た。

岡山(12:21-42)から久しぶりに新幹線に乗り、その混雑ぶりも懐かしかった。座席に座っていると、足は全く痛くは無く、その分今回の失敗の反省やら無念さをしばしば感じた。

相武台に着き、駅前の桜井クリニックにて脚を診てもらったが、骨には異常なく右足首の捻挫による内出血と、オーバーワークによる筋肉痛であろうとの事であった。

もちろん、これ以上歩いたら症状は悪化する、しばらく安静にとの指示であった。湿布薬をもらい早々と帰宅した。



今回の遍路は見事に失敗であったが、考えることも多く、今後の教訓として受け入れ、それを生かして行きたい。